

特42

447

訂正 觀世流譜外 拾遺

寫

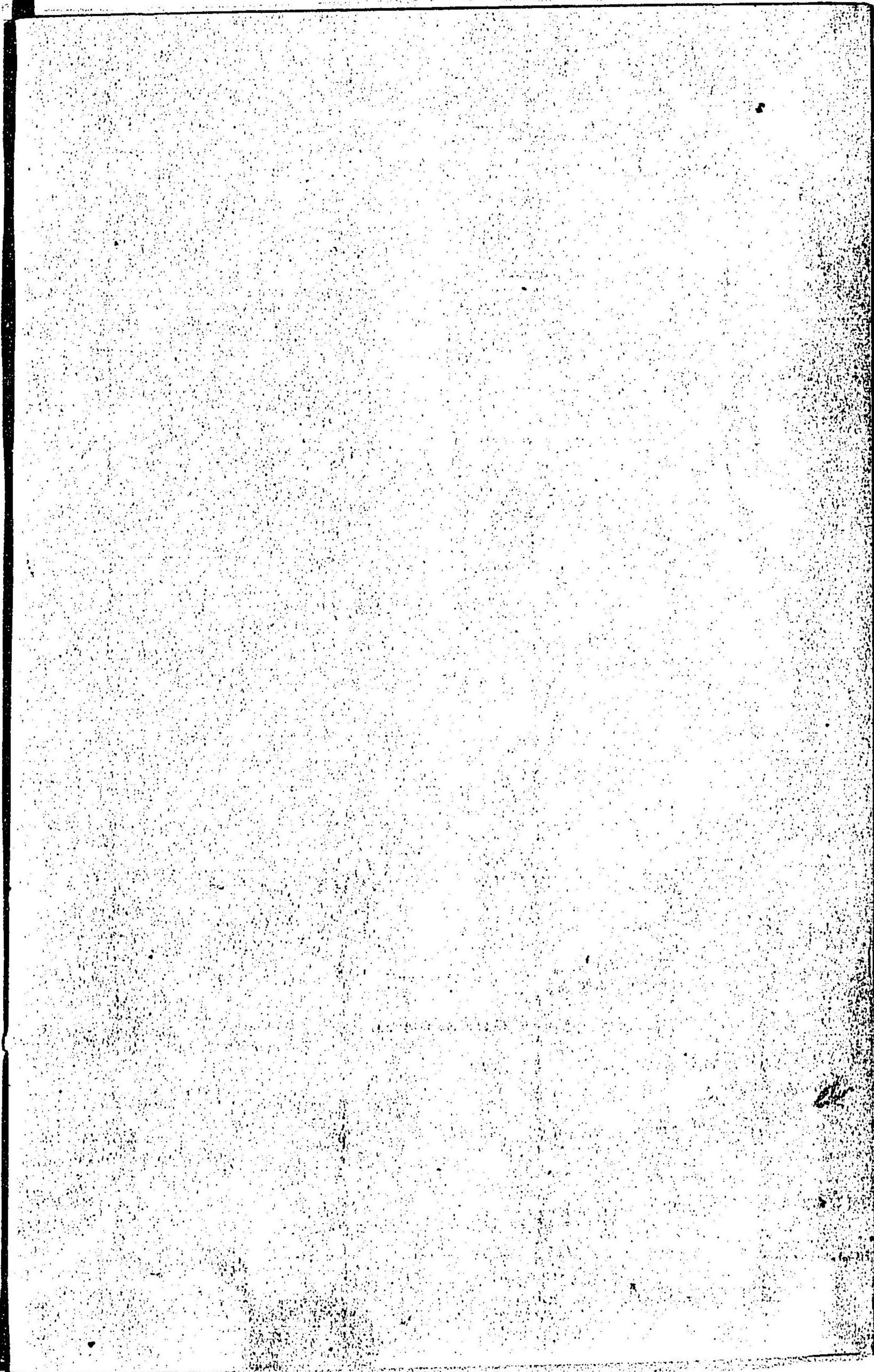
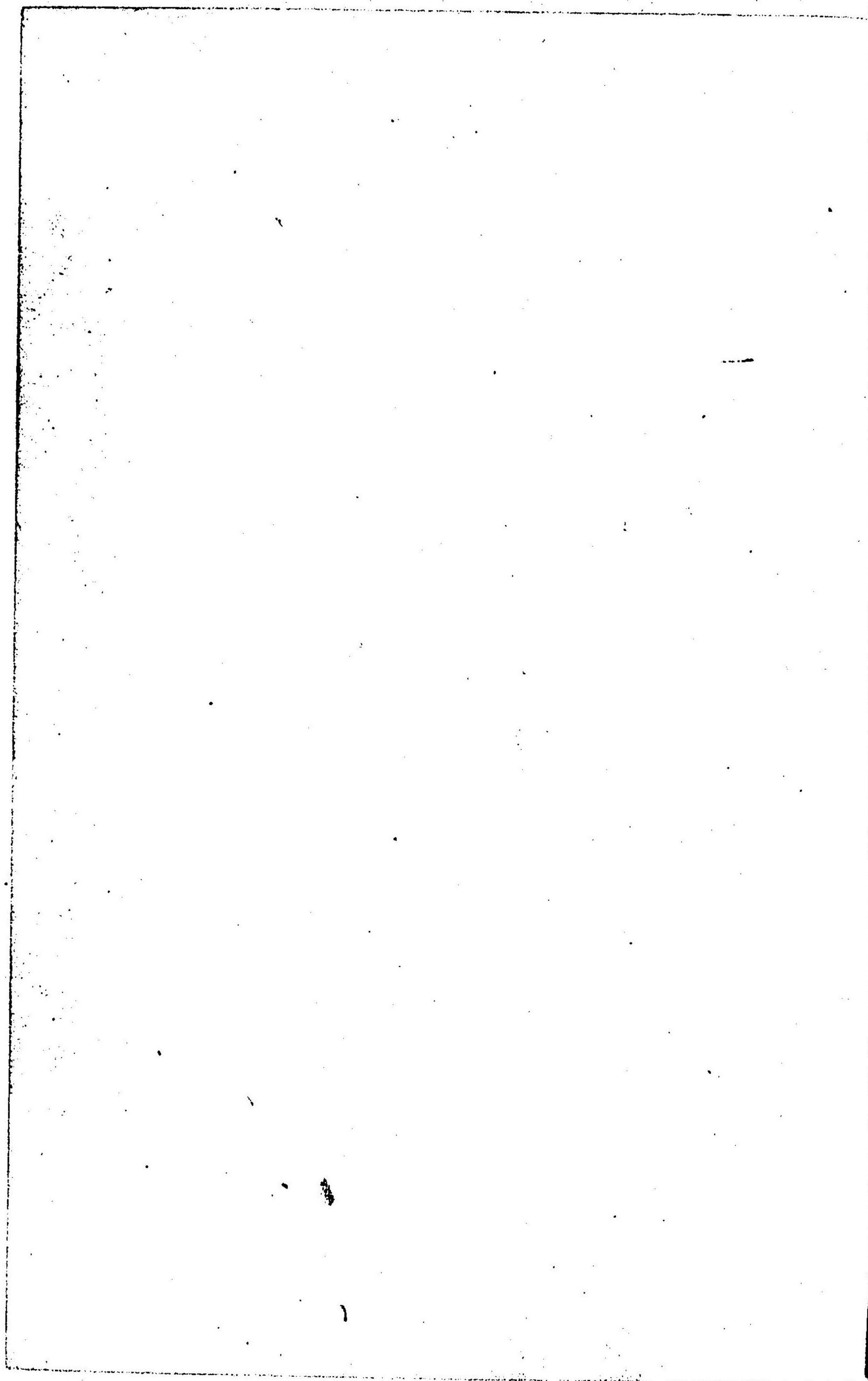
和

大社

方

書

八



鶴亀

平サレ

引青陽の春よあけの西幸の常會の

不老門にて日月の光を

天子の教第ふりて百官歸相する



皇神の御子降るに於て皇教一億

百萬人拜進する方乃ち是一同に存

生れ其音を天に響きて數



庭の地へ銀のくまをさしては敷好き
 いちの錦や瑠璃の扉陣礫の行杉瑪瑙
 け指池のけの鶴亀を逢逢葉山をさうそ
 あらじ君の思きさうがう新ましく
 夢の申へて事の毎年の赤例のよ
 く寝る地をまさきつれもな月宮殿
 かく葉樂と夢をさうがうもさうさう

巻の角もさつらひと亀の萬年の齡
 子徑鶴もまをさうがうと
 様乃ねまじくけさひる角如おねの縁
 乃龜の葉好かざうとまをさうがう鶴もさう
 表齡とまを接せしつ庭よをさうがう
 ち君を御感のゆつちを葉樂と奏う
 て舞給ふキリ上白月宮殿の白衣の袂カクの

多々あまのたつ神秋の雨の枝の葉袖を
きりえ行雲の枝とびりうも夜も清雲
乃雲の人の舞樂の音も雲裳羽衣
の曲もあまの山國もあまの代
万代と舞給へる官人か興丁河興と
やめ君のあまの生殿もあまの長
生殿も遠御もあまの目出度き色

私布の

次々
今日あまの神樂く書きあは
作らしては ツキ 柳早の長門

早あまの神侍申神職乃去也板
もあまの社に於て河系極くあまの中
らも十二月晦日あまの私布の
りあまのあまのあまのあまの

龍神國と守護一坂田方の
とく平とたりよ。古時神皇海中に入
水底乃私布代神おほ信(下)の殊
當年の少思儀の寺、瑞雲庵の同孫信
のて被一河神子と執行のてやと河
有るもやけ早な神乃祭、年の
まらぬ神祭とらるもまらぬ荒玉乃

年のてまらぬとらるもまらぬ荒玉乃
乃歸よ出く己らるもまらぬ荒玉乃
のほらもあく年のてまらぬ荒玉乃
私布代乃まらぬ神祭乃まらぬ荒玉乃
一極よ。君の専と祈ありく
天地乃びきく。代は久曾代神と
まらぬ神祭乃。まらぬ荒玉乃

二二二二
彼乃其御子と稱つる者主耶の竟
宮より召されぬ國より召されず
乃時々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々
神々々々々々々々々々々々々々々々
かき多しは云の上より下界は

龍神々々々々々々々々々々々々
蒼海と陸地とを以て國と長と
乃かき多しは云の上より下界
は云々々々々々々々々々々々々々
上口手地
は云々々々々々々々々々々々々々
まり彼人の御子と稱する者
今其行方を見しは云々々々々々

多かる^上乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

か^上こ^上れ^上紀^上多^上半^上向^上ま^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

あ^上ら^上る^上乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

音^上宮^上乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

乃^上天^上津^上比^上女^上乃^上雲^上は^上き^上て

めり

龍神 上地 龍神 上地 龍神

まぬら 上地 龍神 上地 龍神

可 上地 龍神 上地 龍神

二 上地 龍神 上地 龍神

中 上地 龍神 上地 龍神

と 上地 龍神 上地 龍神

と 上地 龍神 上地 龍神

あ 上地 龍神 上地 龍神

た 上地 龍神 上地 龍神

了 上地 龍神 上地 龍神

唐 上地 龍神 上地 龍神

跡 上地 龍神 上地 龍神

あ 上地 龍神 上地 龍神

和 上地 龍神 上地 龍神

七

海神志記... 蛇神... 龍宮... 入... 子...

大社

祭... 誓... 神... 出雲... 國... 尊... 神... 影... 向... 神... 子... 朝... 立... 旅... の... 衣...

雲霧の如く
 有日色
 國子
 重垣つま
 尾上松乃精
 御拜あり
 御旨
 世の同

神よ
 松乃精
 海村野田
 松乃精
 御旨

一、まのまゝにありてある國より久しうの古を
三ノ下
 知りては成行指さる雨雨とて深
 山邊を望まざる事なきの事なりとれく
四ノ下
 不知葉内の子にむくより南社の神祕
五ノ下
 委しむる物語り久 六ノ下 松出雲國
 大社に二十八社を勸請の地也 七ノ下 聖
 に五人の御事ありて他人事ありと

一、大明神とありりれ給ふ山日指現是
二ノ下
 あり 三ノ下 第一丁六邊乃大の神九列
 一、むらさきの御神と題する御事三三
四ノ下
 一、まのまゝにありて神者陸麻海の明
五ノ下
 神とあり 六ノ下 尊四丁六邊乃大の神
七ノ下
 乃勸請の神也則ありありと
八ノ下
 一、第五丁六邊乃大の神也

二 鳴乃明神とてつる事候河惣言候に
 二 墨の事候言長月やほのめそつら
 二 住齋一所の敷向なるあり
 二 乃神は十月一日は寅の時ハ悉敷向
 二 あり候多々の神遊の候も統々
 二 此宮店にても中く愚なる物事候
 二 知まき有部と物語り末世事

二 居る隔ちの神の威光そつたた
 二 候くちまきや奉るまき方と青神
 二 あり候も保る候く候
 二 神の業教の袖ひやわりのれ
 二 事候とてつらねま垣其まあるか
 二 事候か神の告ると云まそ
 二 入るなり社壇の内入にたり時雨

一 宇も雲をわく月を輝く玉の所殿
 二 三九十一
 三 天座
 四 新ハ是如雲
 五 乃みきまの海をわく佛法を法を身
 六 九十一
 七 神本地十羅刹女此視あり坐容顔
 八 義麗の女神此神クもろのひや
 九 玉此并かのひも自ら杖をたひ夜待の
 十 九十一
 十一 舞樂たわのるや舞たたるひのひ舞
 十二 九十一

一 乃神クもろひくや雲をたひまよの
 二 九十一
 三 其のつるん頭をたひる舞樂を奏し神
 四 九十一
 五 前には所しよもやさく姿好ありり
 六 九十一
 七 物とゆへも書月も雲晴くまのまを
 八 九十一
 九 乃玉垣りたま神祇ありる書
 十 九十一
 十一 古義
 十二 九十一
 十三 三九十一
 十四 乃りり神徳とくもろも天れ恵耶
 十五 九十一

本

六

中^二及^一遊^レ神^ノ祭^ルり^一と^レも^レ頭^一
カ^二リ^一も^レれ^レを^レあ^レく^レゆ^レ也^一
信^二じ^一住^レ吉^レの^レ辰^一 彌^レ防^レ熱^レ田^一
三千^二世^一界^レの^レ法^レ神^一の^レ家^レの^レ敷^レ向^レの^レ祭^一
の^レ小^レ豆^一の^レ袖^一を^レひ^レく^レも^レ面^一白^レ也^一
雨^二の^一雲^一の^レ中^一より^レも^レや^レて^レ吹^レ立^レ辰^一の^レ海^一

龍^二の^一出現^一の^レ時^一 龍^二の^一箱^一の^レ小^レ龍^一を^レら^レま^レ神^一前^一に^レ持^レ也^一
龍^二神^一則^レあ^レり^レれ^レ也^一
龍^二の^一箱^一の^レ小^レ龍^一を^レら^レま^レ神^一前^一に^レ持^レ也^一
龍^二神^一則^レあ^レり^レれ^レ也^一
龍^二の^一箱^一の^レ小^レ龍^一を^レら^レま^レ神^一前^一に^レ持^レ也^一
龍^二神^一則^レあ^レり^レれ^レ也^一
龍^二の^一箱^一の^レ小^レ龍^一を^レら^レま^レ神^一前^一に^レ持^レ也^一
龍^二神^一則^レあ^レり^レれ^レ也^一

東方朔

面^昇一^三如^三や^三四^三時^三う^三の^三り^三屋^三ま^三く^三し^三て^三ま^三る^三
 こ^三夏^三ら^三れ^三今^三う^三の^三も^三や^三お^三秋^三乃^三七^三百^三七^三夕^三
 の^三星^三の^三多^三お^三と^三ま^三く^三あ^三り^三 ^{早連}帝^三乃^三御^三
^{早連}殿^三乃^三ま^三う^三殿^三 ^{早連}お^三あ^三う^三花^三の^三袖^三乃^三ぬ^三
^{早連}七^三室^三乃^三皇^三乃^三金^三銀^三乃^三床^三乃^三君^三乃^三り^三乃^三
^{早連}な^三 ^{早連}官^三軍^三乃^三の^三く^三 ^{早連}お^三の^三乃^三居^三乃^三く^三

日遊さあしとあまのうらみなく樂こしむ
 ぬそののちかたの目よあまの法見城とく
 るはらうと薄る梅もあまの君乃御
 殿さへ廣くあまのさうらうあまのく
 谷あまのさうらうあまのさうらうあまのく
 成はらうとあまの住居外あまの廣く
 汝君のほ教と教と計なりま賢玉

のは代のさうらうあまのさうらうあまのく
 うねばあまのさうらうあまのさうらうあまのく
 時よあまのさうらうあまのさうらうあまのく
 しまの織女のあまの頼とらさくあまのさうらう
 秋あまのさうらうあまのさうらうあまのさうらう
 音うらうとあまの袖も涼さうらうあまのさうらう
 なるひく稲あまのさうらうあまのさうらうあまのさうらう

^{早連}めうれく^高らふ養子^{早連}一^高の事なる
 養子^{早連}はらへるる者な^{早連}り
 外國の傳は位者^{早連}なりやと度子細は
 て^{早連}ま内^{早連}かてら^{早連}はらふ^{早連}方^{早連}あり久
^{早連}見^{早連}へば^{早連}玉の傳は位者^{早連}なりやと^{早連}目^{早連}を度^{早連}瑞
 相の^{早連}心^{早連}に^{早連}て^{早連}ま^{早連}つ^{早連}て^{早連}る^{早連}は^{早連}行^{早連}ふ^{早連}く^{早連}の^{早連}者
 身^{早連}汗^{早連}ぬ^{早連}る^{早連}と^{早連}を^{早連}花^{早連}白^{早連}く^{早連}い^{早連}け^{早連}西^{早連}王^{早連}母^{早連}の^{早連}寵
 受^{早連}の^{早連}身^{早連}なり^{早連}。則^{早連}西^{早連}王^{早連}母^{早連}此^{早連}君^{早連}入^{早連}事^{早連}礼^{早連}ナ
 上^{早連}の^{早連}事^{早連}奉^{早連}ず^{早連}や^{早連}ん^{早連}為^{早連}子^{早連}奉^{早連}り^{早連}て^{早連}る

^早か^早ら^早目^早を^早な^早る^早社^早ら^早の^早行^早は^早仙^早人の^早得^早態^早お
 如^早語^早く^早それ^早仙^早都^早と^早ら^早ん^早人^早同^早な^早ま^早る
 是^早松^早の^早世^早を^早す^早た^早者^早よ^早り^早あ^早る^早く^早年
 の^早経^早き^早や^早を^早し^早樂^早む^早つ^早て^早い^早り^早。我^早の^早自^早在
 乃^早通^早じ^早得^早る^早。夫^早也^早く^早も^早養^早子^早は^早子^早の^早仙

人子つるにわく海探葉の状年
を理て終り成道し給うて大聖
なる事なり給ふ^事あつたに仙人の
ま教^中にても^中のめも^中の母
と國を^下西方極樂の量壽寺に
乃に現るれ^下の^下命に仙人
と成る目^下に^下蘭^下す^下なり

桃の三千年は一度花は実ならず
成り仙薬と成るも思ふは
^上入^下り^下の^下結^下の^下事^下なり
陽事ありて方期を國しと此老
舞り事あり^下の^下桃^下を^下事^下なり
御書命長遠の^下力^下自^下実^下なり
一^下の^下事^下なり^下の^下事^下なり

と庭上を歩つて梅の根の禰の禰と云ふ

物つて形多きよ入よまうく

抑是の他知んらん年久し

東方朔と云ふ事乃か梅を我

西王母の梅と云ふと服を其ぬよ

壽命改ふ九千歳よぬ玉梅堂

と云ふはけりしと云ふあり

いふよちあるよ西王母と云ふ

内申つて思城者馬の宮と云ふ

く白雲一せり梅と云ふ

多乃青鳥翅と云ふて花田

茶を好むる母の女と云ふ

く夜冠と云ふと云ふと云ふ

て頭を給ふまうあつた奇物

二三 王母十一 一
王母の庭より時をらすて
神枕をさしきりてよふ静かなる
は、帝王所感の餘り也。是行ふ志
人教を著しむるの詞也。道く終ふ
舞樂乃秘曲のたぎしりや カキ 舞
樂も物くかきしりて文を以て
かきしりて静かに君よと申
海くしりては帝王の跡を
終るるひも内なること也。白雲
白く入るはひかきぬ。王母といへば
うみをゆくはしりては静かなる
ちりりて静かに静かに地のが
しりて静かに静かに地のが

春榮

早河
是と高橋権頭とて作。梅もけを
宇治橋の合戦の時方打勝り捕る
名村とある。某の夫の因の所
中より。言堂殿に申す。此の人は捕
りて。此由と。上りて。人の心は。死
海に申す。この事。上りて。同春榮殿

るけりし事なりや
まこと言ふ行く花さか風よりそよ

是の武藏國の住人増えぬ即ち

ての傳もくは移り入新より手の

射も其長きなりと云ふ傳も

岡よ身よりし事深入り中

きり多し久し主捕行

後さゆ由の岡某と因入

まじりし事今も栄ふ

やまの都の空の雲井

しつ後夜日おひ

のまじりし事今も栄ふ

しつ後夜日おひ

まじりし事今も栄ふ

橋より申候事と對面なり

よふ^上長^上の^上の^上業^上の^上申^上の^上因^上人^上な

行^上の^上精^上願^上の^上行^上成^上の^上事^上の^上何^上

の^上事^上の^上頼^上だ^上る^上人^上の^上事^上の^上何^上

昔^上の^上事^上の^上是^上の^上業^上願^上の^上事^上

の^上事^上の^上高^上橋^上願^上の^上事^上の^上目^上の^上

事^上の^上方^上の^上事^上の^上是^上の^上事^上の^上事^上

由^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上

の^上事^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上

の^上事^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上

の^上事^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上

の^上事^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上

の^上事^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上の^上事^上

春景

まじりておぼしき口禁制の申す可^テなり

たう口とあるまじく^{コキ} 口禁廢の由

とあるは^{ニテ}口禁の由に

是^早口禁廢の由に^テ口禁の由に

春榮の免まじりて^テ口禁廢の由に

まじりて^テ口禁廢の由に

肩と射た^テ口禁廢の由に

まじりて^テ口禁廢の由に

口禁廢の由に^テ口禁の由に

まじりて^テ口禁廢の由に

まじりて^テ口禁廢の由に

まじりて^テ口禁廢の由に

まじりて^テ口禁廢の由に

まじりて^テ口禁廢の由に

た乃本郎好まはるる新方とて異人御所

出らるる事にては對面人 ナカノ 別入御所

に先立りしより御所格入御戦ひて重

手御所御命不御命は御所御所 ナカノ

御所御命不御命は御所御所 ナカノ

御所御命不御命は御所御所 ナカノ

御所御命不御命は御所御所 ナカノ

御所御命不御命は御所御所 ナカノ

御所御命不御命は御所御所 ナカノ

御所御命不御命は御所御所 ナカノ

御所御命不御命は御所御所 ナカノ

御所御命不御命は御所御所 ナカノ

御所御命不御命は御所御所 ナカノ

御所御命不御命は御所御所 ナカノ

に命を捨てる種は田舎の殿に
まよ 誠なるものもあらず
現世の果ては家入の罪人
いふ所はさういふ今も地獄の
世に殿もあらずと云ふは
いふ所はさういふ今も地獄の
世に殿もあらずと云ふは
いふ所はさういふ今も地獄の
世に殿もあらずと云ふは

刀をもちては 勞者も切らぬ
物もいふ 命もたす
家入の者もあらず
けりかたもあらず
書生もいふ 國入守護
命もたす
言は道に涉

先帝の御中と感し申すも常服
はつていかに種直も家業を承継
痛りの事御の事おつらふ事と人持
ておぼやけ橋の合戦よりおぼやけ
も家業のたよりさもたつた同
天啓の命も助かりました。果し
は御事つしを申すも今おつた
御事

やうな御事おぼやけも有る事
申すも後ゆつた。又御事より早
うらやま。箱根の御事。因今も皆
殊一とまはれはつた。痛りの御事
力あるも家業の御事。御事。御事
とつた申すも御事。御事。御事
とつた御事。御事。御事。御事

き切の古くもあつて同春堂を助き集
と清くして給りて入^早 信の古くもあつて
ども目錄もあつてはあつて同中を叶
ひまゝに^三 信もあつてあつて人なびよ
私とあつて。ま集を助き集と稱して給
る入^早 信の古くもあつてあつて古くも
あつて補^三 信の古くもあつてあつてあつて

もあつてあつてあつてあつてあつて
乃捨りてあつてあつてあつてあつて
一可も清くして給りて入^早 信の古くもあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

小三歳成りては...
申す人^{クキ}是成母...
給う...
所...
榮...
馬羽...
所...

母...
下...
心...
母...
下...
心...
母...
下...
心...

あつたてまつりてはば *Shōmeigō*

當の申にちり。因入せ人のさげあり

依イ榮殿ニセ入ルらハあハれ

去クて清シけ付テ若ク支シ別レ當ノ上ニ

あり。因入せ人多クなり。第一番ニよ

別レ當ノ上ニ身ノ豊ニ前ノ月ノ計ニ番ニ

多クなり。次第ニ等ニまゝハ増ル尾ニ

よシ榮凡疎クいハちク清クくリ益々わ

助ル春榮とハ大カ下リしニ

たテ命助兄才城ノ甲ノくニ

思ハれノ心ノ計ノ黙ノ雲ノは

さシ地ノ情ヲ親シ兄才は

社ノ城ノ長ノはハれハ直ニ

に申ス前ノにハよシ榮殿の上

